

おわりに

多分、お読みになった何人かの方々は、石浦の頭の中は昔と変わっていないな、とお思いになったことだと思えます。一般的な生物学の講義をイメージしていた方は驚いたかもしれません。私も、全部読み通したあとに、「はじめに」に書いたように、新しいことにチャレンジできたろうかという思いがこみ上げてきました。できれば、今までにない形式の大学新入生向けの生命科学講義を立ち上げたいと思っていましたが、どうだったでしょうか？今回は、大学上級生向けの病気の発症メカニズムや治療などの話は入れることはできませんでしたが、この内容で広く生命科学に興味をもっていただけで勉強のきっかけになったのではないかと思います。

新型コロナウイルスのパンデミックでわかったことはいろいろあります。新しいmRNAワクチンも二〇〇五年にアメリカが科学研究費を増額したときの応募課題だったこと、アメリカはこの困難にもかかわらずここ二〇年科学研究費の増額を続けていること、それに比べてワクチンで遅れをとっている日本の貧しい科学の現状は二一世紀に入ってからからの研究費の持続的削減から来ていることなどです。科学を国策にする以上、先を見通すことのできる科学者や政治家が必要であることは言うまでもありません。

本書には、科学の発展に伴ういろいろな問題（放射線の影響、ゲノム編集と遺伝子組換え、

生命倫理についての考えの相違、など）が避けて通れないことを伝えたいという目的もありました。本書を題材にして、普段、生命科学を意識していない方たちの議論が進むことも期待しています。

羊土社の編集部も若返り、生命科学講義という定義に関しても、私と若い方々の意見の相違がありました。専門用語の説明はできるだけ避け、関係のある興味深い話を極力入れるという私の主張を通していただきました。これには羊土社編集部の今城葉月さんにご尽力いただき、いろいろお世話になりました。鳥山拓朗さんには素敵な装幀デザインをしていただきました。厚く御礼申し上げます。

二〇二二年六月

リモート授業で毎日が日曜日、体力の衰えを感じている自宅にて

石 浦 章 一